

国語教育（表現指導）

山下 直

平成24年に見られた興味深い動向として、二つの動きに注目したい。

一つ目は、文法や語彙の学習との関連を具体的に捉えようとする動きである。

10月に富山大学で開催された第123回全国大学国語教育学会富山大会のラウンドテーブル「作文と推敲に関わる語彙・文法事項に関する研究」では、表現指導にいかにつなげるかという視点から、学習者の作文などに実際に見られる文法的な問題点の分析が試みられた。

松崎史周（目白大学）は文のねじれや同類の節の重複、宮城信（小山高専）は形式名詞「こと」使用の実際をふまえ、文法や語彙の学習と表現指導との関わりに迫った。

また、矢澤真人（筑波大学）、安部朋世（千葉大学）は、平成21年度全国学力・学習状況調査中学校国語A問題の、

- ・この（＝モナリザ）絵の特徴は、どの角度から見ても女性と目が合います。

を取り上げた。この問題は正答率が50.8%と低く、報告書でも「主語と述語を適切に対応させて書くことに課題がある」とされている。

矢澤・安部はBCCWJで「特徴は」を主語とする文を調べ、主述のねじれが約7%生じていることを指摘した。また、「特徴」以外にも「性質」などの抽象名詞について同様の調査を行い、抽象名詞を主語とする文のねじれを修正するには、主語と述語の対応だけでなく、その名詞の用

法・文型に関する知識、対応する形式名詞に関する知識などへの着眼が必要であることを示した。

文法や語彙の学習を表現能力の向上にいかにつなげるかは国語教育の大きな課題の一つであり、これらの試みは、表現指導と語彙、文法の学習の関わりについて、具体的な方向性を模索する上で重要な示唆を与えるものと言える。

二つ目は、7月に大修館書店から刊行された島田康行著『「書ける」大学生に育てる—AO入試現場からの提言』をはじめとする高等教育との連携を視野に入れた動きである。

本書は「大学進学を目指す高校生は、文章を「書くこと」をどのように学ぶのだろうか。一方、大学に入学する学生には、どのような「書くこと」の力が求められているのだろうか。「高大接続」のプロセスは、その両者の間でどのように働いているのだろうか。」（「はじめに」より）といった問題意識に立脚している。

これは、初等中等教育段階を中心に論じられてきた表現指導の研究に、高大接続、高大連携という視点を持ち込むことの重要性、必然性を我々に改めて認識させる。大学ではどのような能力が求められ、そのために高等学校段階までにどのような能力を身に付けさせておくことが必要なのか。大学における表現指導の重要性を認識せざるを得ない現状において、高大接続、高大連携の視点はこれからの表現指導を論じる上で不可欠なものとなっていくであろう。

（文部科学省）